

# 消防人であること



仙台市消防局長 結城 由夫

長期にわたり続いているコロナ禍の状況下にあっても、高い危機感としっかりした目的意識を持ち続けて、多様な消防業務に注力を頂いている全国の消防職員の皆様に対し、心から敬意を表しますとともに、深く感謝を申し上げます。

世界は今、長引くコロナ禍と紛争の最中にありますが、こうした困難な社会情勢の中であっても、人命救助を主眼とした災害対応や立入検査等の予防業務、そしてこれらに付随する様々な業務の普遍的な継続が、我々消防には求められます。

連日、ウクライナの惨状がニュース等で放映されていますが、その中で、現地の消防隊が戦火の間隙を縫って懸命に消火・救助活動を行っている様子を見る度に、「消防の崇高な理念は世界共通であり、普遍である」ということを強く認識させられ、胸が熱くなるのを感じるのは、皆様も同じかと思います。

それともう一つ、短い映像からではありますが、消防力が圧倒的に劣勢であろう混乱を極める現場においても、慌てふためくことなく、消防隊員の一人ひとりが、今やるべきこと、やれることを理解し、それぞれが主体性を持って活動していると私なりに感じることで。

消防は階級制度によって指揮命令系統の明確化が図られていますが、同じ階級であっても、経験年数やこれまでの業務経験の違いによって、係や隊の中では求められる役割というものは当然に違ってきます。上位の階級者から「指示されたこと」だけをやるのは比較的容易で楽なことでもありますが、そこには組織人としての成長は期待できません。そもそも、個々の職員それぞれが、所属している課や係、隊の中で、自分の役割や期待されていることは何なのか、いわゆる「立ち位置」というものを常に意識すること、そして、これを踏まえて「主体性」を持って仕事に向き合い、積極的に行動することが極めて重要であり、組織人として社会人としての基本だと思っています。

私は、消防の仕事が多くの人に理解され、或いは尊敬される理由として、大きく二つの要因があると思っています。

一つは、人命救助という崇高な目的があり、それを達成するための「力強さ」を求め続けていること、もう一つは、消防職員は災害現場での、いわゆる要救助者に対しては勿論のこと、「何時でも」、「どんな場面でも」、そして「誰に対しても」優しいということです。逆に言えば、優しく、力強くない消防は、国民、市民から理解や信頼が得られないということになります。消防人として、これからも、より力強く、より優しく、ということを常に念頭に置いて、日々の業務にあたっていただければと思います。

訓練や事務仕事等で分からないことや辛いこと等、「壁」に突き当たったり、或いは失敗したりすることも当然にあるはずで。そういう時こそ、自分なりに頑張る壁を乗り越えようとする前向きな気持ちで取り組み、周りの同僚や先輩も、そうした努力をしっかり認めて、「失敗しても、またやり直せば良い」という寛容さを忘れない、そうした気持ちや思いやりを通じて、力強さと優しさを養ってほしいと願うところです。